

中世あわらの豪族・溝江一族

あわら市郷土歴史資料館

一般展示室企画展示ゾーン

あわら市域は中世においてその大半を河口荘、坪江上郷・下郷という奈良興福寺の荘園に含まれていました。河口荘は十郷で構成され、その中のひとつに溝江郷があり、そこを本拠地として活躍していたのが溝江氏です。しかし、彼等がどのような一族でどんな活躍をしていたのかあまり知られていません。本展ではあわらで活躍した豪族・溝江氏について古文書史料を中心に紹介してまいります。

1 金津城溝江落城之図



この絵は溝江氏の居城、金津城が加賀・越前の一方向一揆勢に攻められ、落城した時の様子が描かれています。

『朝倉始末記』によると、天正二(1574)年二月十日に総勢二万余りで取囲れ、十九日には落城しました。城主大炊允長逸、その父河内入道宗天(景逸)、長逸の弟で菩提寺の妙隆寺住職辨栄等をはじめとした一族三十余人が自害して果てました。

ただ一人、長逸の子の長氏は難を逃れ、その後織田、豊臣に仕え家を再興します。本絵は朝倉始末記の記述を元に、志田彌廣氏が描いたもので、緊迫した様子が伝わってきます。

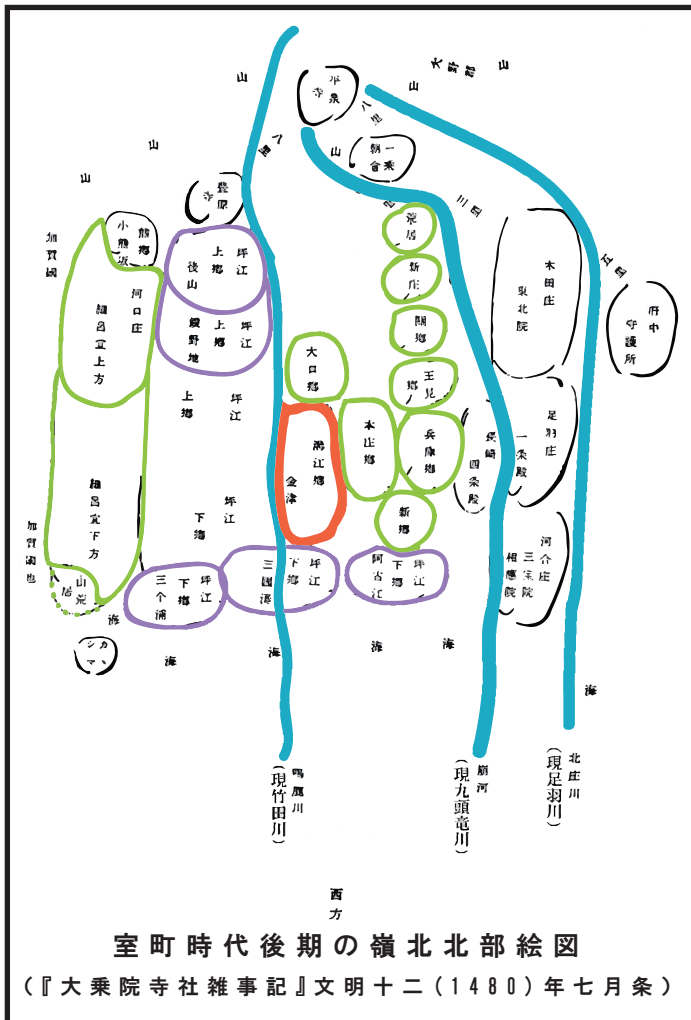
志田 彌廣氏筆(1982年 あわら市所蔵)

2 溝江郷と溝江氏

地名として溝江の名前が史料に現れるのは、奈良時代の東大寺荘園に「溝江荘」が見られるのが最初です。その後、平安時代後半に奈良・興福寺の荘園・河口荘に含まれ「溝江郷」となりました。現在の稲越から谷畠あたりにあったと考えられています。河口荘は興福寺にとって有力な荘園であったため、記録の中にしばしば登場します。室町時代においては有力武士が代官に任命され、溝江郷では越前守護代の甲斐氏や、後に越前国

を治めるようになる朝倉氏などが代官となっています。

さて、溝江氏とはどのような一族だったのでしょうか？『朝倉義景亭御成記』では、同名衆の中に溝江の名前が見られ、また江戸時代に作られた家系図には朝倉氏庶流とあります。しかしこれらを裏付ける史料はとぼしく、正確にどのような出自なのかはわかりません。史料で最初に溝江氏の名前が登場するのは、『大乘院寺社雑事記』明応五（1496）年の記事の中に、溝江郷代官として「溝江殿朝倉党」と出てきます。これ以降は朝倉氏の家臣として活動が散見されるようになります。主に一向一揆との戦いで活躍します。その戦いの中で軍功を上げ勢力を伸ばしていきます。



溝江氏の本拠地は苗字の由来でもある溝江郷にありました。明治時代の地籍図には館跡と記された区画が残っており、一辺約100mの方形に近い形をしています。

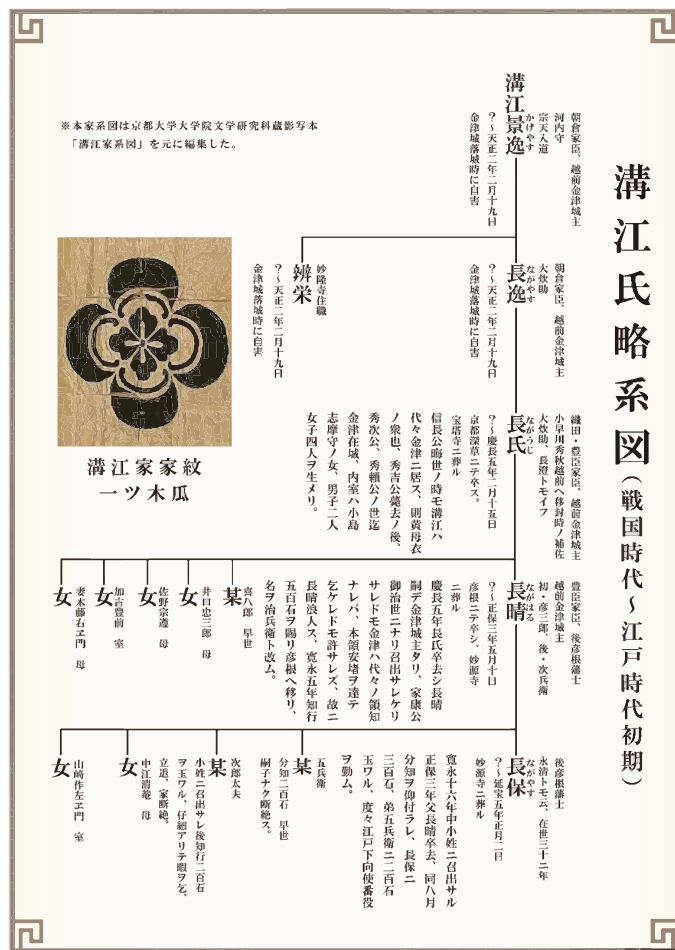
旧金津町の時代、館跡内、堀、周辺部と3箇所の調査を行っています。それらの場所からは13～16世紀の遺物が出土しています。溝江氏の活動が見られるより前のものも含まれており、出土遺物の内容もあわせて推察すると、この辺は古くから溝江郷の中心地として栄えていたと考えられます。



3 溝江氏中興の祖 長氏

右の家計図は京都大学文学研究科所蔵の『溝江家系図』（影写本）を元に、他の史料で補い作成しました。景逸より前の代では「溝江彦次郎」「溝江虎市」などの名が『大乘院寺社雑寺記』に見られますが、景逸とどのような関係にあったのかは残念ながらわかりません。

さて、金津城落城の難から逃れた長氏ですが、その後織田家に仕えて家を再興します。下に掲載した『羽柴秀吉書状』（原本：石川武美記念図書館所蔵）に、魚津城攻に参加していることが書かれています（ポイント①）。この魚津城攻めは北陸方面司令官の柴田勝家が行っており、その軍に参加しているのは北陸に所領を持っている人々が中心でした。そこから推測すると、この文書が発給された天正十（1582）年には、長氏は家を再興し、北陸に所領を持っていたものと考えられます。



「溝　大炊允殿　秀吉

御返報

將亦、此書狀共、乍御造作
此方より飛脚に被仰
御届候て、返事ハ長浜
年寄共まで可越給候。
併たのミ入候。以上。

此表在陣為御見廻、
遠路預御使札殊鳥子
被懸御意候。如御書中、
来候。誠寄思召御音信、
毎々御懇情、祝著不淺候。
越後面御働候て、越中内
魚津城被取卷旨、御辛
勞無是非候。昼夜御氣
遣与令察候。

一 今度東国　御動座之
刻、西国面為御手当、播
州ニ雖被殘置候、其儘可
在之儀ニあらず候と存、備
中内へ押入、令山取、則敵
城かむり山之城井かわやか
城、此間十五町計候を、同
前取卷候事

一 右之取卷候城より五十町西
幸山与申城ニ小早川在城候。
毛利・吉川も令着陣、後
卷可仕ニ相究由候間、合戦
儀者不余長候へ共、兩城取
卷如何与存、去月廿五日ニ
かむり山之城攻崩、城主
林三郎左衛門尉・松田孫次郎
始而、其外城中者不殘
一人、三百余人討果、則
大將兩人首安土へ致進上候事
一 同取卷候河屋城事、四方
より仕寄を申付責詰、
水之手を取、是又十三日ニ
落去候事。

一 右之競ニ加茂之城端城

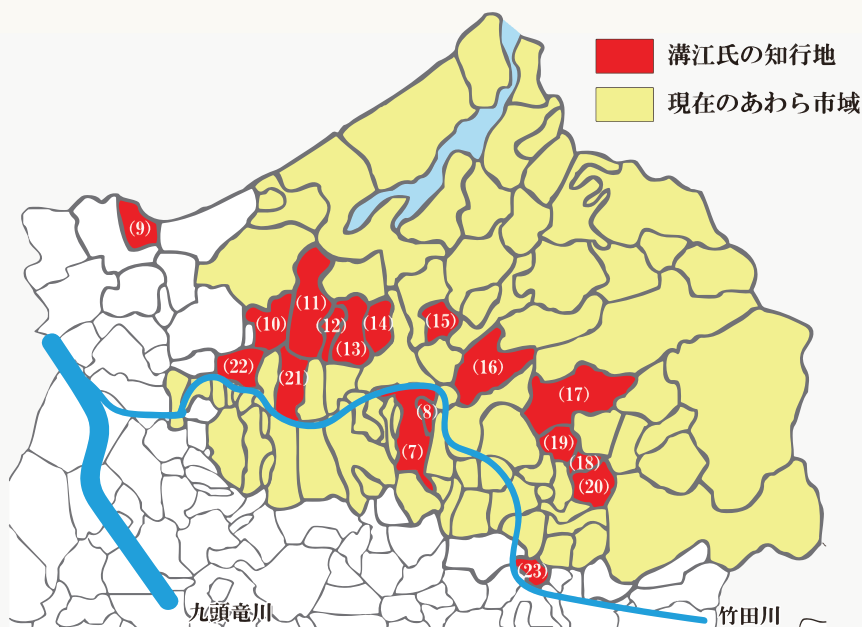
注目ポイント①

乗崩、悉令放火、本丸計はたか城ニ申付候事。
一 亀石と申城色々降参仕候間、令赦免、居城ニ召出候事
去八日、同備中内高松与申城取巻候。當城事、平城ニ而候を、數年相拵、其上三方深田にて賣口無之候之間、廻ニ堤を丈夫ニつかせ近所之川を切懸、水責ニ申付候。はや端城の土居を水打越候間、落居不可有何程躰候事。
一 毛利・吉川・小早川事、右ニ如申候、當陣所より五十町西幸山ニ候。先の陣所十町十五町之間ニ候得者、目之前にて諸城如取分申付候。今十日五日之内ニ、高松事可為落居ニ付而、後巻儀是非可仕由候。不定候へ共自然於罷出者、及一戰、即時切崩、悉可討果事。
一 海上之儀、能嶋・来嶋・塩飽迄一篇ニ申付、何も嶋之城を請取、人數入置候。然者此方警固船之儀、開戸迄も掛太目、恣ニ相動候。何之道ニ西国之儀、急度可任取分候条、於時宜者、可御心易候。猶追々可申承候。恐々謹言。
(天正十年)
五月十九日 秀吉 (花押)
溝江大炊允殿
御返報



豊臣秀吉知行宛行目録（影写本、原本所蔵：彦根城博物館）

あわら周辺の溝江氏知行地



番号	旧名	現名	番号	旧名	現名
(1)*	竹生村	福井市竹生町	(13)	家古村	あわら市井江段
(2)*	朝宮村	福井市朝宮町	(14)	横垣村	あわら市横垣
(3)*	金屋村	丹生郡越前町青野	(15)	清王村	あわら市清王
(4)*	馬場村	不明	(16)	山室村	あわら市山室
(5)*	横山村	丹生郡越前町横山	(17)	篠岡村	あわら市篠岡
(6)*	城在村	福井市城有町	(18)	北村	あわら市北
(7)	金津町	あわら市市姫・春宮・大溝	(19)	北野村	あわら市北野
(8)	同荒町	あわら市市姫・春宮・大溝	(20)	中川村	あわら市中川
(9)	かち浦村	坂井市三国町梶	(21)	田中中村	あわら市田中々
(10)	舟津村	あわら市舟津	(22)	布目村	あわら市布目
(11)	国影村	あわら市国影	(23)	里竹田村	坂井市丸岡町里竹田
(12)	二面村	あわら市二面			

*はあわら周辺外のため地図に記載なし

藤井 謙治「慶長三年の太閤検地関係資料」『福井県文書館研究紀要7』2010年を参考に一部加筆した

前頁の史料に見られるように、秀吉と個人的なつながりを持っていた長氏は、信長が倒れた後は秀吉に仕え、目立たないながらも確固たる地位を築いていきます。これは他の史料から伺えることですが、長氏は人とのつながりをととても大事にした人物だったようで、さまざまな人にさりげない気遣いを行い、豊臣政権内で信頼を得ていました。そして晩年に大幅な加増を受け所領を1万石強まで引き上げられました。上掲の文書はそのときの目録です。地名を見ると、現在とほぼ同じであることがわかります。また、拝領した所領は加越台地と竹田川に挟まれた、早くから開拓が進んだ良地であることが見て取れます。

右掲の鎧は長氏所用と伝わっているもので、隣の旗幟と一緒に、溝江氏の御子孫から旧金津町時代に寄贈いただいたものです。籠手や佩楯に使用されている南蛮鎖や家地に使われている布は当時としては高級品を使っており、このあたりを治める領主としてふさわしいものです。

また幟に描かれている家紋は一つ木瓜紋で鎧の籠手にも同じ紋が入っています。三つ木瓜紋を使用していた朝倉氏との関連がこれからも推測されます。

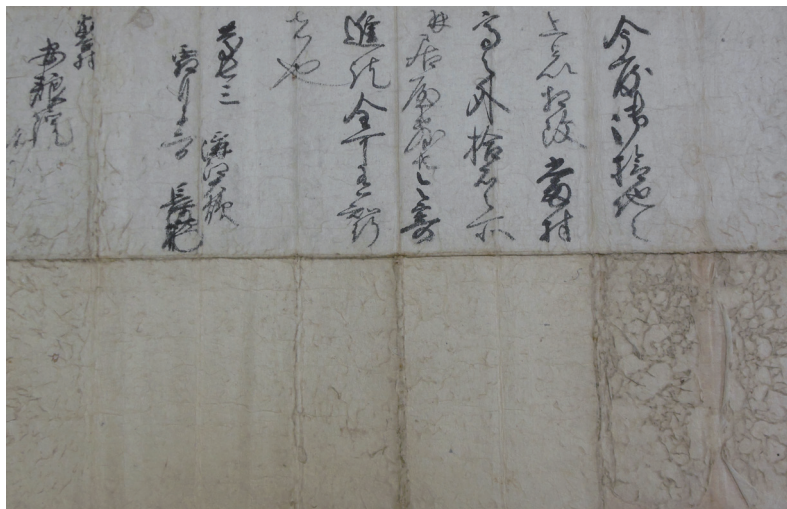


市指定文化財
朱銀振分塗伊予札二枚同具足（左）
溝江家家紋入旗幟（右）
（共にあわら市所蔵）

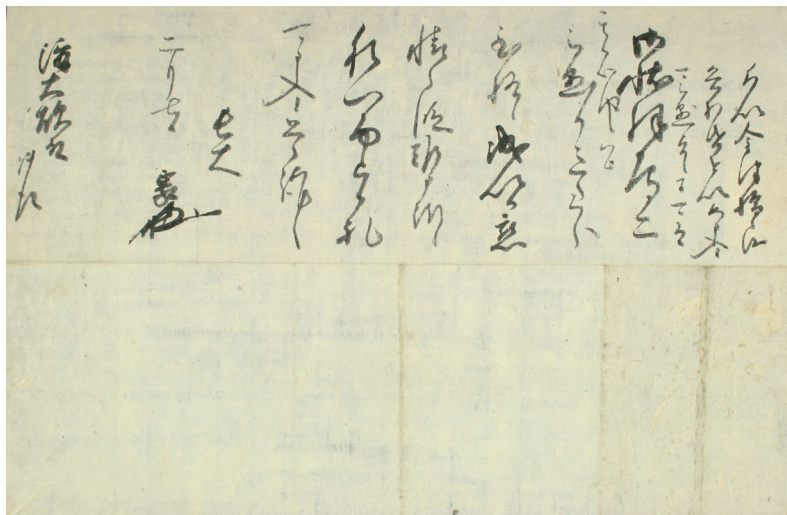
4 溝江氏の政治

溝江氏の治政を知ることができる史料はほとんど残っていませんが、下掲の二つの文書はわずかながら教示してくれます。

上段の文書は、市内に残る数少ない溝江氏発給の文書で、寺領と屋敷の寄進状です。寄進を受けたのは安養院で、ここは浄土真宗高田派の寺院で、溝江氏が信仰していた日蓮宗とは宗派が異なります。



溝江長氏寄進状（原本所蔵：安養院）



長束正家書状（原本所蔵：早稲田大学図書館）

しかし領内の寺院を保護し、公平に取り扱っていたことが伺えます。

また、下段の文書は豊臣政権で五奉行の一人だった長束正家からの書状です。本文は長氏からの心遣いに対するお礼状ですが、注目すべき点は袖書に記されています。内容は、以前長氏が申請した金津橋（現市姫橋と推定）架橋について許可が降りるので準備をしておくようにと書かれています。

これが金津橋架橋に関する最初の史料で、恐らく長氏が竹田川に橋を架けた最初の人物だったと考えられます。長氏の父や祖父の代では、竹田川は一向一揆との戦いにおける防御線として重要な意味を持っており、そこに戦いを不利にする橋を架けるわけにはいきませんでした。しかし長氏の代になり、国内の戦争が少なくなった結果、戦略上の意味より、領民の生活を優先して竹田川に橋を架けることを決断したと思われる。

溝江氏関係略年表

天平勝宝元(七四九年)	溝江荘が東大寺領荘園となる
延喜七(九〇七年)	大溝神社が式内社に列せられ、大溝神に從四位が贈られる
康和二(一一〇〇年)	河口荘が奈良興福寺の荘園となる
弘安九(一二八〇年)	「溝江郷」が史料に初めて見られる
永仁六(一二九〇年)	三笠山から春日の神霊が下向し、大溝神社に合祀される
応永二(一四一四年)	河口荘職人の中に、溝江郷公文に守護代(甲斐帶刀入道祐徳)、政所に甲斐濃州入道、代官に富田と見られる
文正一(一四六〇年)	河口荘職人の中に、溝江政所・公文に甲斐氏、別当に朝倉と見られる
文明三(一四七二年)	朝倉敏景が越前守護に補任される
文明三(一四八〇年)	朝倉孫右衛門持分城の中に金津城(河口内溝江也)とある
文明十五(一四八三年)	北国給人の中に、溝江政所・景遠(景栄)が見られる
明応五(一四九〇年)	「溝江氏」が史料に初めて見られる。またこの頃から朝倉氏に臣従したと思われる
永正三(一五〇六年)	溝江氏、朝倉氏に従い、一向一揆勢と九頭竜河畔で戦う
弘治一(一五五五年)	河内守景逸・大炊允長逸、朝倉宗満に従い、加賀へ出陣する
永禄十(一五六七年)	河内守入道(景逸)、朝倉義景の命により、魚住・山崎両将と共に本荘の堀江氏を攻める
永禄十一(一五六八年)	朝倉同名衆の中に「溝江大炊允景家、藤三郎景嘉、三郎右衛門尉、左近允景満」が見られる
元亀一(一五七〇年)	金ヶ崎城合戦のとき、長逸が七百騎を率いて金津城を守り、富樫介泰俊、一向一揆の難を逃れて溝江館に身を寄せる
天正一(一五七三年)	八月、溝江左馬允が刀祢坂の戦いで戦死する
天正二(一五七四年)	八月、織田信長が越前に攻入り、朝倉氏が滅亡する
天正三(一五七五年)	十一月、大炊允長逸、上洛し織田信長より旧領に加え朝倉土佐守跡を宛行われる 二月、金津城が一向一揆勢に攻落とされ、溝江氏、富樫氏一族が自刃する 長逸の子・長氏はのがれる 織田信長が一向一揆討伐し、柴田勝家が北ノ庄城主となる

5 その後の溝江氏

滅亡の淵に立たされながらも、豊臣政権で堅実な活動の末、大名格まで知行地を増やした長氏は慶長五(1600)年に京都の深草で亡くなります。跡を継いだのは息子の長晴です。しかし、後を継いですぐに行われた関が原の戦いの関係で所領を没収され、金津から追われてしまいます。

天正十(一五八二年)	大炊允長氏、柴田勝家に従い、上杉景勝の魚津城攻めに従軍する ※資料①
天正十(一五八二年)	羽柴秀吉より高松攻めの戦況を知らせる手紙をもらう ※資料①
天正十三(一五八五年)	豊臣秀吉より越前本知行分三千石を宛行われる
天正十四(一五八六年)	越前金津知行千石、越前府中近辺千五百石、上方で千石、あわせて三千五百石を宛行われる(五百石加増)
文禄年中	文禄の役において、肥前名護屋で後備となる
慶長三(一五九八年)	六月、小早川秀秋が越前北の庄に移封となり、大炊助長氏が与力となり補佐する
慶長三(一五九八年)	七月、家吉村(現あわらし市井江蓼)の安養院へ寺領を寄進する ※資料②
慶長三(一五九八年)	八月、秀吉より加増を受け一万七百七十三石となる ※資料③
慶長三(一五九八年)	豊臣秀吉が伏見城で亡くなる
慶長四(一五九九年)	このころ、金津橋(市姫橋)を架橋する ※資料④
慶長四(一五九九年)	三月、長氏、大阪城堀普請の命を受ける
慶長五(一六〇〇年)	十月、長氏、増田長盛を通じて子の彦三郎長晴を徳川家康に目通りさせる
慶長五(一六〇〇年)	二月、長氏、京都の深草で亡くなる
元和二(一六〇六年)	四月、長晴、旧封を安堵され長氏の跡を継ぐ
元和二(一六〇六年)	長晴、関が原の戦いにおいて西軍に付き、戦後所領を没収され浪人となる
寛永五(一六二八年)	長晴、彦根藩井伊家の客分となり、近江国坂田郡箕浦村に居住する 以降、溝江家は彦根藩士として江戸時代末まで続く

長晴は浪人生活を送りながら、さまざまな伝を頼り金津への復帰を働きかけていきました。しかしその願いは叶わず、最後は寛永五(1628)年に彦根藩に仕官し井伊家の家臣となりました。子孫はその後彦根藩士として明治まで仕えていきました。その関連もあり、彦根城博物館には散逸した溝江文書の影写本が伝わっており、溝江家のことを知る貴重な手がかりとなっています。

あわらし市郷土歴史資料館

福井県あわらし市春宮二丁目14-1金津本陣 IKOSSA 2階

電話：0776-73-5158 FAX：0776-73-1038